

公安委員会定例会議(第7回)の開催状況

第1 日 時 令和7年3月12日(水)
午後2時07分 ～ 午後4時10分

第2 出席者 佐伯委員長、五葉委員、小野委員
本部長、総務室長、警務部長、首席監察官、生活安全部長
刑事部長、交通部長、警備部長、警察学校長、情報通信部長
総務課長

第3 議事の概要

1 小野委員説示

まもなく4月を迎え、新入社員の入社シーズンとなりますが、先般、いわゆるZ世代とのかかわり方に関する講演会に参加しました。Z世代とは、1996年から2012年頃までに生まれた世代を指し、幼い頃からインターネットやスマートフォンに囲まれて育った「デジタルネイティブ」といわれています。講演会では、そのZ世代の意識や考え方について考える良い機会となり、多くの気づきを得ましたので、お話ししたいと思います。

50歳から60歳代の多くの方は、かつて「新人類」と呼ばれた世代で、高度成長期やバブル経済、その崩壊を経験しました。団塊の世代から教育や指導を受け、よく働き、消費意欲の高い世代といわれています。他方で、Z世代は物心付いたころからインターネットが身近で、多様な価値観を持っているため、従来の働き方や考え方が通じない点があり、多くの企業にとって課題となっています。

私ども製造業の現場では、決められた手順を守ることが重要で、長年の経験や熟練を積み重ねていくことが評価される業界ですが、Z世代は効率重視で自由な発想を好む傾向があり、それ故、従来の「経験を積んでから成長する」という考え方が敬遠される傾向にあります。

私自身の経験を振り返ると、Z世代の社員に対し、多くの誤ったアプローチをしていたことに気づきました。例えば、給料を増やすために、「早く帰っても暇なのであれば毎日残業してみても」と指導したり、ある特殊な業務に突出した技能を持たせるため、一つの業務を集中的に行わせたこともありました。さらに将来のリーダーを育成しようと過度に期待し、自覚を促そうとしました。しかし、これらのアプローチは、Z世代の「競争したくない。過度に期待され失敗したくない」といった価値観と合わず、結果として士気の低下や離職につながる原因となっていたようです。

また、コミュニケーションの取り方にも課題がありました。製造業では、口頭での指示や現場での暗黙の了解が多く存在します。「前にも言っただろう」、「このくらいわかるだろう」といった表現は、Z世代にはほとんど通用しません。伝達ミスや意思疎通の不足は、彼らのやる気を削ぐ原因となります。今回の講演で、世代間の意識の違いを受け入れ、互いに歩み寄ることでより働きやすい環境を築くことができることを学び、非常に有益な話でしたので参考にしてください。

2 決裁事項

(1) 公安委員会定例会議の会議録

総務室から、令和7年第6回公安委員会定例会議の会議録について伺いがあり了承した。

(2) 公安委員会規則（愛媛県道路交通規則等）の改正

交通部から、公安委員会規則（愛媛県道路交通規則等）の改正について伺いがあり了承した。

(3) 公安委員会訓令（愛媛県公安委員会事務専決規程）の改正

交通部から、公安委員会訓令（愛媛県公安委員会事務専決規程）の改正について伺いがあり了承した。

(4) 公安委員会規定（運転免許証の経由申請に係る事務取扱要領の制定について）の改正

交通部から、公安委員会規定（運転免許証の経由申請に係る事務取扱要領の制定について）の改正について伺いがあり了承した。

(5) 公安委員会規定（運転免許行政処分事務取扱要領の制定について）の改正

交通部から、公安委員会規定（運転免許行政処分事務取扱要領の制定について）の改正について伺いがあり了承した。

(6) 運転免許の行政処分に係る意見の聴取・聴聞

交通部から、運転免許の行政処分に係る意見の聴取及び聴聞結果について報告があり、審議の結果、19件の行政処分の決定について伺いがあり了承した。

3 報告事項

(1) 夜間における庁舎のセキュリティ確保に向けた取組

警務部長から、夜間における庁舎のセキュリティ確保に向けた取組について報告があった。

委員から、「警察署の規模によって夜間の体制は異なると思うが、相応の体制でセキュリティ確保に万全を期されたい」との発言があった。

委員から、「警察署に対する襲撃事件等もあり、職員の安全確保は重要な問題である。こうした取組によって職員や庁舎の安全確保を図っていただきたい」との発言があった。

委員から、「警察職員の単独勤務時におけるセキュリティ確保と県民の利便性向上の両方に資する良い取組だと思う。今後、大規模署への拡大についても検討いただきたい」との発言があった。

(2) メンタルヘルスセミナーの開催

警務部長から、メンタルヘルスセミナーの開催について報告があった。

委員から、「メンタルヘルスは、どのように予防し解決するかが問われており、官民間問わず対策が必要な重要課題である。対象職員が職場復帰できるよう、休暇取得の在り方も含めて検討いただきたい」との発言があった。

委員から、「民間企業においてもメンタルヘルスは重要な取組であり、こうした講演会は被害者にとって救済手段となるほか、周囲がメンタル

ヘルスに気付くきっかけになる」との発言があった。

委員から、「メンタルヘルスは悪化する前に声かけやサポートをすることが大事である。悪化すると回復に時間を要するため、当事者を精神的に追い込まない、周囲が異変に気付いて予防措置を講ずることが何よりも重要である」との発言があった。

(3) 令和6年中における山岳遭難発生状況

生活安全部長から、令和6年中における山岳遭難発生状況について報告があった。

委員から、「山岳遭難の救助や警備は大変な仕事である。これから女性隊員も必要な時代となってくる。女性隊員の加入も含めて山岳警備体制の強化に努めていただきたい」との発言があった。

委員から、「西日本は高い山が少ないため、登山未経験者にとって挑みやすいほか、山岳信仰の面から高齢者の登山も多く、予期せぬ事態への対応は大変だと思うが、訓練を重ねて緊急時に備えていただきたい」との発言があった。

委員から、「登山は人気のスポーツであるが、高齢者も多く、疲労や道に迷い遭難するケースが少なくない。石鎚山は簡単な山ではないため、危険性を広報啓発するなどして山岳遭難の予防に取り組んでいただきたい」との発言があった。

(4) 愛媛県中予地方局職員らによる官製談合防止法違反・公契約関係競売入札妨害事件の摘発（再逮捕）

刑事部長から、愛媛県中予地方局職員らによる官製談合防止法違反・公契約関係競売入札妨害事件の摘発（再逮捕）について報告があった。

委員から、「捜査を徹底し、癒着の実態や関係性を明らかにしていただきたい」との発言があった。

委員から、「入札制度を悪用した事件であり、全容解明を図っていただきたい」との発言があった。

委員から、「公務員として許されない犯罪である。公共工事において県民の税金が適正に使用されるよう県警察の捜査によって警鐘を鳴らしていただきたい」との発言があった。

(5) 高速道路交通警察隊の活動状況

交通部長から、高速道路交通警察隊の活動状況について報告があった。

委員から、「降雪等による予防的な交通規制は道路管理者との連携が重要である。どの段階で交通規制を開始するか、タイミングが重要で、円滑な交通を妨げないよう適切な判断に努めていただきたい」との発言があった。

委員から、「夏場になると高速道路を利用するバイクが増えるが、車と違って疲労が溜まりやすいため、適度に休息を取るよう広報啓発に努めていただきたい。また、落下物の拾得等に伴う警察職員の殉職受傷事故防止にも万全を期していただきたい」との発言があった。

委員から、「高速道路上での活動は危険と隣り合わせであり、殉職受傷事故の絶無を期すよう安全に留意した活動をお願いしたい」との発言があった。

(6) 伊方発電所サイバー攻撃共同対処訓練の実施結果

警備部長から、伊方発電所サイバー攻撃共同対処訓練の実施結果について報告があった。

委員から、「日本はサイバー攻撃に脆弱だと一部で指摘されているが、巧妙化するサイバー攻撃に対処するには体制構築が重要である。訓練を重ねて対処能力の向上に努めていただきたい」との発言があった。

委員から、「いろいろなサイバー攻撃を想定した訓練に取り組むとともに、伊方発電所との情報交換や訓練を通して得た気づきなどを生かして効果的な対策を講じていただきたい」との発言があった。

委員から、「この種事案は、犯罪捜査や警備を重視する警察側と営業再会を急ぐ事業者側とで必ずしも利害が一致しないことが多いと思うが、相互に訓練を重ねて問題点を洗い出し、想定される事態を考えて協働して訓練に取り組み安全を確保することが重要である」との発言があった。

(7) 警察職員の任用

警務部から、警察職員の任用について報告があった。

(8) 監察案件に関する報告

警務部から、監察案件に関する報告があった。

(9) 特殊詐欺（預貯金詐欺）・窃盗事件被疑者の逮捕

刑事部から、特殊詐欺（預貯金詐欺）・窃盗事件被疑者の逮捕について報告があった。

4 その他

本部長から、「委員から、仕事に対する世代間の意識の違いを受け入れる必要性についてお話をいただいた。県警察においても、世代間の意識の差を感じているところで、例えば警察学校では、現在の若者世代に応じて規則を緩めるなど、柔軟な対応に取り組んでいる。警察特有の不合理、前時代的な規則や慣習は見直していく一方、コアな部分まで踏み込んで見直すかは慎重に考えなければならない。規則等の見直しを、前例に捕らわれない柔軟な発想と評価するか、時代の風潮に応じた安易な迎合ととるか、境界線上にあるが、何を変え、何を守っていくのか、考える時期に来ていると思う」との発言があった。

以 上